

中宮定子と「琵琶行」の女

——『枕草子』漢詩受容の問題をめぐって——

鄭 順 粉

一 はじめに

『枕草子』における漢詩文引用の問題を論じる時よく取り上げられる例の中に、清少納言が中宮定子の美しさを『白氏文集』「琵琶行」の女の連想によって賞賛する話がある。この「琵琶行」引用については、従来主に中宮と商人の妻という身分の問題から言及されることが多く、高貴な身分である中宮を商人の妻である卑賤な身分の女に比較することは、漢詩文の断片的な引用の陥る非常識な行為として酷評を受けてきた。

ところで、そのように元来の漢詩文における人物と引用文における人物との間に身分の差が生じることは、「琵琶行」のように平民を素材とした白氏文集の作品を、宮中を舞台とする平安貴族文学に接続するには必然的に発生する現象であって、ある意味ではやむを得ないことと言える。そして、清少納言の言葉は中宮定子を「琵琶行」の女と同格にすることに留まるものではなく「琵琶行」の女を持ち込むことによって定子の容姿の素晴らしさを際立たせたものである。つまり、当該の引用例において注目すべき

点はむしろ、如何に当座の場面に「琵琶行」の女を導入し中宮定子の美を映し出すものとして魅らせているか、の引用方法ではないかと思われる。それは、清少納言の言葉に引かれている「琵琶行」の女と原詩「琵琶行」の女との間にイメージや身分の「ずれ」が存在するからである。

本稿では、中宮定子の姿に『白氏文集』「琵琶行」の女を重ね合わせた場面に見られる〈ずれ〉を確認し、その〈ずれ〉を解明することによって『枕草子』の漢詩文受容の問題について考えてみることにしたい。

二 両「琵琶行」の女間におけるイメージの〈ずれ〉

では、まず清少納言の言葉に引かれている「琵琶行」の女と原詩「琵琶行」の女の間における〈ずれ〉を確認することから始めたいと思うが、その前に当該の引用例を含む『枕草子』の本文を引用しておく。

上の御局の御簾の前にて、殿上人、日一日、琴、笛、吹き遊び暮して、大殿油まるるほどに、まだ御格子はまゐらぬに大

殿油さし出でたれば、外のあきたるがあらはなれば、琵琶の御琴を、縦様に持たせたまへり。紅の御衣どもの言ふも世の常なる、打ちも張りたるも、あまたたてまつりて、いと黒うつややかなる琵琶に、御袖をうちかけてとらへさせたまへるだにめでたきに、そばより、御額のほどのいみじう白うめでたく、けさやかにて、はづれさせたまへるは、たとふべき方ぞなきや。近く居たまへる人にさし寄りて、「なにかば隠したりけむは、えかくはあらざりけむかし。あれは、ただ人にこそはありけめ」と言ふを、道もなきに分けまゐりて申せば、笑はせたまひて、「別れは知りたりや」となむ、おほせらるる、と伝ふるも、いとをかし。(九〇段)

上の御局の前で一日中管弦の遊びが行われた日、夕方になって燈火が灯されるが、中宮定子はその明かりに顔を隠そうと琵琶を縦様に持つ。その中宮の姿がこの世に喩えるものがないほど美しく、まるで『白氏文集』『琵琶行』における場面を髣髴させたため、清少納言は「琵琶行」の一句を引用し中宮の幻想的な美態を賞賛する。それを聞いた隣の女房が衆人の中を分け入って中宮に伝え、中宮は満足そうに微笑みながら「別れは知りたりや」と応じたという内容である。

最後の中宮の言葉「別れは知りたりや」は、清少納言の「琵琶行」引用に対する反応であり、その意味によって当該章段全体の性格をも左右し得る、重要なものであるが、本文の異同もあって現在、十人十色と言うほど注釈者によってその解釈がそれぞれ分かれており、いまだに妥当な説が見出されない状況である。その

ような事実は『枕草子』本文そのものが中宮定子の言葉の意味を不明確なものにしていることを表し、その問題をも含めた綿密な考察が要されるが、詳しい論証は後日にゆずることにして、本稿では、中宮定子の言葉については、清少納言の「琵琶行」引用に対する好意的な反応として取ることに止まり、主に清少納言の言葉を中心に考えていくことにしたい。

清少納言の言葉「なにかば隠したりけむは、えかくはあらざりけむかし。あれは、ただ人にこそはありけめ」は、従来その典拠として「琵琶行」の第十四句「猶抱琵琶半遮面」が指摘され、現在定説となっている。すなわち、燈火の明かりを琵琶で遮断している中宮の姿に、白樂天らの前で恥ずかしそうに琵琶で顔を半分隠している「琵琶行」の女の姿を重ね合わせたものとして見る事ができるが、この清少納言の言葉は訳してみると「明かりに顔を半分隠そうとした『琵琶行』の女は、このようにはなりえなかつたでしょう。あの『琵琶行』の女は『ただ人』だったので」となる。「かく」という指示語が、その前に叙述されている中宮定子の具体的な姿、すなわち紅の服を着て琵琶に袖を掛けて白い額を出している、この世に喩えるもののない「めでたき」姿をさすと思われるので、清少納言の言葉は結局、「琵琶行」の女が中宮定子の美質に及ばないのは「ただびと」という身分のためである、つまり、両者ともが美しい容姿の持ち主である、という意味になる。ところが、元来の『白氏文集』『琵琶行』の女は、清少納言の言葉に引かれているような美女ではなかつたようである。「琵琶行」の本文は次のようである。

琵琶引 井序

元和十年、予左遷九江郡司馬。明年秋、送客湓浦口。聞舟船中夜彈琵琶者、聽其音、錚錚然有京都聲。問其人、本長安倡女、嘗學琵琶穆曹二善才。年長色衰、委身為賈人婦。遂命酒、使快彈數曲。曲罷憫默。自叙少小時歡樂事、今漂淪憔悴、轉徙於江湖間。予出官二年、恬然自安。感斯人言、是夕始覺有遷謫意。因為長句歌以贈之。凡六百一十二言。命曰琵琶行。

潯陽江頭夜送客 楓葉荻花秋索索 主人下馬客在船
舉酒欲飲無管絃 醉不成歡慘將別 別時茫茫江浸月
忽聞水上琵琶聲 主人忘歸客不發 尋聲聞彈者誰
琵琶聲停欲語遲 移船相近邀相見 添酒迴燈重開宴
千呼萬喚始出來 猶抱琵琶半遮面 軋軸撥絃三兩聲
未成曲調先有情 (中略) 東船西舫悄無言

(中略)

唯見江心秋月白 沈吟放撥揮絃中 整頓衣裳起歛容
自言本是京城女 家在蝦蟆陵下住 十三学得琵琶成
名屬教坊第一部 曲罷曾教善才伏 粧成每被秋娘妬
五陵年少爭纏頭 一曲紅綃不知數 鉏頭雲篋擊節碎
血色羅裙翻酒污 今年歡笑復明年 秋月春風等閑度
弟走從軍阿嬖死 暮去朝來顏色故 門前冷落鞍馬稀
老大嫁作商人婦 商人重利輕別離 前月浮梁買茶去
去來江口守空船 巡船月明江水寒 夜深忽夢少年事
夢啼粧淚紅闌干 我聞琵琶已嘆息 又聞此語重唧唧
(下略) 『白氏文集』卷十二

すなわち、「琵琶行」の女は、芳若の時は教坊の第一部に属する

くらしい琵琶の才能も秀でており容貌も優れていた(序と本文の波線部)が、白楽天の前で琵琶を弾いている現在はずでに年老いて容色も衰えた商人の婦の状態(序と本文の点線部)である。つまり、清少納言の言葉に引かれている「琵琶行」の女と元来の『白氏文集』「琵琶行」の女との間には容貌の面において大きな(ずれ)が存在するのである。

三 二重の典拠

このように清少納言が「琵琶行」の女を容貌端麗の人として引用している背景としては、まず『白氏文集』「琵琶行」の他に同集の「夜聞歌者」をも典拠としているという、典拠の二重性が考えられる。

夜聞歌者 唐鄭州

夜泊鸚鵡洲 秋江月澄澈 隣船有歌者 発調堪愁絶
歌罷繼以泣 泣声通復咽 尋声見其人 有婦顔如雪
独倚帆樯立 娉婷十七八 夜淚似真珠 双双墜明月
借問誰家婦 歌泣何凄切 一問一露襟 低眉終不説

『白氏文集』卷十二

この「夜聞歌者」は、長安から江州に下る途中鄂州に泊まった時の経験を作品化したもので、夜江上で美しい歌声の女性と出会う、という場面設定が「琵琶行」に酷似しており、「琵琶行」のモチーフになったものと見られる。但し、「夜聞歌者」の場合は、「琵琶行」とは違って、主人公の女が、顔が雪のように白い、十七・八才ぐらい(傍線部)の若くて美しい女性である。そのよう

な「夜聞歌者」の女の容姿は、当時十八・九才ぐらいだった中宮定子の姿、具体的には『枕草子』本文中の点線部「御額のほいみじう白うめでたくけさやか」な姿に類似すると言えよう。『白氏文集』の中で「夜聞歌者」は、「琵琶行」の五篇前に配置されており、清少納言がその内容を熟知していたことは、容易に推察できることである。また、『枕草子』の中には、漢詩文引用の際、類似するモチーフの作品を区別せず複合的に典故とする場合が他にも見られる。つまり、当該の場面において中宮定子の姿に「琵琶行」の女と「夜聞歌者」の女のイメージを同時に重ね合わせていたことは、充分想定し得ることではないかと考えられる。

ところで、それだけでは、解決されない問題が残る。清少納言の言葉において「琵琶行」の女が「ただ人」と称されている点である。当該の「ただ人」という言葉は、勿論中宮に対立する概念で「中宮でない人」「平凡な人」の意味であるが、当時の用字法によれば一般的に官位の低い、中・下流貴族をさすものであつて、船上で芸を売る「琵琶行」の女や「夜聞歌者」の女を表すようなものではなかった。つまり、当該の引用においては原典故との間にイメージの〈ずれ〉だけでなく身分的な〈ずれ〉も存在するのである。どうやら当該の「琵琶行」引用にはより複雑で巧緻な方法が用いられているようである。

四 「琵琶行」の女に対する当時の認識

では、ここで当時日本では、『白氏文集』『琵琶行』の女がどのように認識されていたのか、その概念について考える必要がある

ように思われる。

文学作品に引用される漢詩文は、当然ながらその作品の世界に合わせた形で脚色され受容される。そのような点から見ると、『枕草子』とほぼ同時代成立の『和漢朗詠集』は、当時流行していた漢詩文の句そのものを部類別に収録しており、漢詩文の句自体に対する当時の観念を垣間みせる恰好な資料となる。しかし、残念ながら現存『和漢朗詠集』の中には「琵琶行」の句が一つも採られていない。そこで、『枕草子』と『和漢朗詠集』よりや後代の成立ではあるが、『新撰朗詠集』に目を転じてみると、『新撰朗詠集』の中には「琵琶行」の句が「送別」「管弦」「遊女」の三部に収録されている。その中で「琵琶行」の女を意識して採られたと思われる句は、「遊女」の部に入っている。ここに『新撰朗詠集』『遊女』の部に収集されている全句を記してみる。

- 670 南北東西不定家 風水為郷船作宅 塩商婦
- 671 東船西船悄無言 只見江心秋月白 琵琶引 白
- 672 家來江河南北岸 心通上下往来船 遊女 以言
- 673 桂華秋白雲閑夜 蘆葉春青水冷天 同
- 674 心からうきたる舟に乗りそめて一日も浪にぬれぬ日 ぞなき

遊女欲乗商船船人以梶打懸水袖掩面泣詠此歌 作者 小町

すなわち、「琵琶行」の女は、『新撰朗詠集』の時代には「遊女」として認識されていたことが明らかであるが、その『新撰朗詠集』における「遊女」という概念は、採集されている句による

と、居所が一定せず江上の船中で客を相手にしながら生活をする女の通称であることが知られる。そして、そのような『新撰朗詠集』における「遊女」の概念は、『枕草子』と同時代の『和漢朗詠集』の「遊女」の部においてもほぼ同様である。次に、『和漢朗詠集』の「遊女」部の全句をあげてみる。

719 秋水未鳴遊女佩 寒雲空滿望夫山 賀蘭遂

720 翠帳紅閨 万事之札法雖異 舟中浪上 一生之歡会

是同 以言

721 倭琴緩調臨潭月 唐櫓高推入水煙 順

722 白浪のよするなぎさによをすぐす海人の子なればや

どもさだめず 海人詠

『和漢朗詠集』の場合は、句数の少なさから『新撰朗詠集』の時代ほど「遊女」に対する関心が高くなかったことが窺われるものの、「遊女」の概念は『新撰朗詠集』の場合と多く重なっており、やはり「水（江）」と「放浪」のイメージが強かったように思われる。『和漢朗詠集』と『新撰朗詠集』の「遊女」観は、ほぼ同一であり、『枕草子』の時代もそのような考え方と見なしてよい。つまり、「琵琶行」の女が『枕草子』を含む当時の人々には、「遊女」の概念で認識されていたと見られるのである。

ところで、当該の『枕草子』の本文における「琵琶行」の女は、先述したように中宮の美しさと同系統の、宮中を舞台とする美貌の女のイメージであって、水上の船中で客を相手に芸を売ったりする『和漢朗詠集』や『新撰朗詠集』における「遊女」のイメージとは明らかに相違するものである。枕草子に引かれている「琵琶行」

「琵琶行」の女のイメージは、むしろ『和漢朗詠集』や『新撰朗詠集』における「妓女」の概念に合致するものとして見られる。

五 清少納言の言葉における

「琵琶行」の女のイメージ

『和漢朗詠集』の「妓女」の部には、次のような句が採集されている。

706 容貌似舅 潘安仁之外甥 氣調如兄 崔季珪之小妹

張文成

707 外人不識承恩処 唯有羅衣染御香 元

708 嬋娟兩餐秋蟬翼 宛轉双蛾遠山色 白

709 莫怪紅巾遮面咲 春風吹綻牡丹花 白

710 李延年之飭族 託一妍以始飛 衛子夫之待時 在衆

醜而水異 野

711 秋夜待月 纔望出山之清光 夏日思蓮 初見穿水之

紅艷 催粧序

712 算取官人才色兼 粧樓未下詔來添 菅

713 双鬟且理春雲軟 片黛纔生曉月纖

714 羅袖不遑迴火熨 鳳釵還悔鎖香匣

715 和風先導薰煙出 珍重紅房透翠簾

716 嫌褰錦帳長薰麝 惡卷珠簾晚著釵 白

717 欲充今日新飢舞 泣賣先朝旧賜簪 紀

718 天つ風雲のかよひぢふきとぢよ少女のすがたしばしとどめむ

右掲の句によると、和漢朗詠集における「妓女」という概念は、宮中に仕えている容貌端麗な美女をさすことが多く、特に日本の漢詩句の場合は宮中行事の宴の際歌舞を披露する内教坊の妓女達が、そして和歌の場合は五節の舞姫が「妓女」として当てられていることが知られる。そのような様相は、例えば、

① 九日侍宴。各分一字、応製

蕭辰供奉一佳期 拜舞紛紛白玉墀 恩賜黃花纔虎口
勅催紅袖慙蛾眉 五雲晴指登高处 千日暮知解醉時

算取重陽名教樂 此生長斷茹靈芝 (『首家文章』九九)

② 早春内宴侍仁寿殿、同賦春娃無氣力、應製 菅贈大相国

夫早春内宴者。不関荆楚之歲時。非踵姬漢之遊樂。自君作故。及我聖朝。(中略) 於是粧樓進才。粉妓從事。纖手細腰。受之父母。軟雲機李。備于髮膚。况陽氣陶神。望玉階而余喘。韶光入骨飛紅袖而羸形。彼羅綺之為重衣。妬無情於機婦。管絃之在長曲。怒不関於伶人。姿態繽紛。神也又神也。新声婉轉。夢哉非夢哉。(下略)

③ 三月三日、侍宴同賦間柳発紅桃、應製 儀同三司(藤原伊周)

三日花朝和暖辰 紅桃間柳発粧新 烟濃纔透綏山月
黛動半藏曲水春 碧玉簾中裁錦妓 青羅帳後舉燈人
震遊如旧群臣醉 醉意詠歌魏代塵 (『本朝麗藻』「春」一)

などの「妓女」の用例から確認されることもあるが、ここで注目したいことは、妓女達が管弦の演奏(音楽)と緊密な関わりを持ち、またその姿態が「紅袖」として象徴化される、という点である。

ある。その音楽をバックとした妓女達の「紅袖」の姿は、当該の『枕草子』における管弦の遊びを背景とした中宮定子の「紅の御衣」の姿と大いに重なるのである。⁽⁹⁾ 中で③の藤原伊周作の漢詩の場合、簾の中の妓女の姿とそこに明かりが灯されるという設定が、当該の『枕草子』の場面と酷似している。また仮名文学における「妓女」舞姫の様子については、多くの作品においてその容貌が優れていたことが確認されるが、特に『枕草子』八八段と『紫式部日記』の寛弘五年十一月二十日条には、帳台の試みの時に舞姫が燈火に照らされている姿が描かれている。赤色の服を着て明かりに照らされている舞姫の姿が、当時の女房や貴族達にとって如何に印象的な光景として映っていたか、窺い知られる。このように、当該の清少納言の言葉においては、「琵琶行」の女が、当時の一般的な概念である「遊女」のイメージではなく、「妓女」のイメージで引かれていることが明らかになるのであるが、なお、その「琵琶行」の女の「妓女」としての姿は、年中行事の際の宮廷の内教坊の妓女や五節の舞姫の持つ、天から下ってきた天つ女(仙女)のイメージで、当該の『枕草子』の場面において「たとふべきかたぞなきや」とこの世にない幻想的な存在として讃えられる中宮定子の姿とも似通うものである。

六 「ただ人」としての「琵琶行」の女

上記の事実、当該の枕草子の引用例において「琵琶行」の女が「妓女」のイメージで引かれていることは、清少納言の「あれはただ人にこそはありけめ」という言葉、すなわち「琵琶行」の女

を「ただ人」と称していることから裏付けられる。「ただ人」
【直人・徒人】の語義は、①普通の人間、常人②（帝・后に對し
て）臣下の稱③撰闕家以外の貴族④官位の低い人（『角川古語辭
典』）となるが、『枕草子』の中には当該の例の他に次の四例が見
られる。

①めでたきもの（中略）

六位の藏人。いみじき君たちなれどえしも着たまはぬ綾織
物を、心にまかせて着たる青色姿などの、いとめでたきな
り。所の雑色、ただ人の子どもなどにて、殿ばらの侍に、
四位、五位の司あるが下にうちゐて、なにとも見えぬに、
藏人になりぬれば、えも言はずぞあさましきや。（下略）

（八四段）

②（前略）ただ人の、上達部の北の方になり、上達部の御女、
后に居たまふこそは、めでたきことなめれ。（下略）

（二八一段）

③（前略）思ひ忘れたりつることを、おぼしおかせたまへり
けるは、なほただ人にてだに、をかしかべし、まいて、お
ろかなるべきことにぞあらぬや。（下略）

（二六二一段）

④（前略）上も、うちおどろかせたまひて、「いかでありつ
る鶏ぞ」など、尋ねさせたまふに、大納言殿の、「声、明
王の眠りをおどろかす」といふことを、高ううちいだした
まへる、めでたうをかしきに、ただ人のねぶたかりつる目
も、いと大きになりぬ。（下略）

（二九七段）

①と②の場合は上流貴族に対する官位の低い人の意味として、

また③と④の場合は帝と中宮に対する臣下の意味として用いら
れており、いずれも「ただ人」は清少納言自身を含む中流貴族層を
さす意味として用いられていることが分かる。ところが、当時の
「遊女」は、例えば、

①遊女 楊氏漢語鈔云、遊行女兒又云阿曾比女一云、昼遊行謂
之遊女、待夜而發其淫奔者謂之夜發。

（『和名類聚抄』二・「乞盜」）

②（前略）君達の御前にうかれめ二十人ばかり、ことひきう
たうたひて、御衣給はれり。（後略）（『宇津保物語』「藤原君」）
③下の心かまへてわろくて、きよげに見ゆるもの
唐絵の屏風。石灰の壁。盛物。檜皮葺の屋の上。川尻の遊

女。

（『枕草子』二・本五段）

④（前略）道のままに、かひある逍遙遊びののしりたまへど、
御心にはなほかりて思ひやる。遊女ども集ひ参れる、上
達部と聞こゆれど、若やかに事好ましげなるは、みな目と
どめたまふべかめり。されど、いでや、をかしきこともも
ののあはれも人からこそあべけれ、なのめなることをだに、
すこしあはき方に寄りぬるは、心とどむるたよりもなきも
のを、と思すに、おのが心をやりてよしめきあへるも、う
とましう思しけり。

（『源氏物語』「薄標」）

に見られるように、『和名類聚抄』の中には「乞盜」の部類とし
て入れられており、他の散文作品においても、芸を売つてものを
貰う、卑賤な身分として描かれているのである。『枕草子』の中
には、③に示した三卷本第一類本保有の「一本五段」に、その用

例が一例見られるのみであるが、この場合、「遊女」が一見綺麗そうに見えながら汚い裏側を持つものとして類聚されていることを考慮すると、清少納言の「遊女」に対する認識も、卑賤なものとする当時の一般的な觀念の枠から出るものではないと言える。つまり、清少納言の言葉における「ただ人」という言辞の背後には、「遊女」のような部類ではなく、中宮定子に対する臣下という意味の、主に中流階級から選ばれる「妓女」（内教坊の妓女・五節舞姫）の存在が看取されるのである。¹³

七 終わりに

では、最後に『枕草子』の当該の引用例におけるイメージの転換が何を意味するのかについて述べてみたいと思う。

『白氏文集』『琵琶行』は、中国では「長恨歌」と並べられるくらいに人口に膾炙されるものであったが、それに比べると日本の平安文学においては、あまり盛行しなかったものの一つである。『菅家文章』などに「琵琶行」の断片的な語句が用いられていることを見ると、平安初期にも「琵琶行」が享受されていた様子が垣間見られるが、句単位で一句全体が引用されたのは、『枕草子』が最初である。そのように「琵琶行」が平安時代の中期まであまり流行しなかった理由としては、すでに指摘されているようにモデルそのものが零落して田舎に住んでいる、年老いた商人の妻であり、またテーマもその零落した女に対する同情と作者自身の不遇に対する嘆息であることがあげられよう。結局、「琵琶行」という作品は、平安時代の貴族の生活とは合わない、いろいろ

ろな要素が含まれていたのである。¹⁴ それにもかかわらず『枕草子』の中には「琵琶行」の引用例が三つの章段に互って4例も見られるのはどうしてだろうか。次に、当該の章段以外の例をあげる。

①御仏名のまたの日、地獄絵の御屏風とりわたして、宮に御覽せさせたてまつらせたまふ。ゆゆしういみじきこと限りなし。「これ見よ、これ見よ」と、おほせらるれど、「さらに見はべらし」とて、ゆゆしきに、こへやに隠れ臥しぬ。雨いたう降りてつれづれなりとて、殿上人、上の御局に召して、御遊びあり。道方の少納言、琵琶、いとめでたし。済政、箏の琴、行義、笛、経房の中將、笙の笛など、おもしろし。一わたり遊びて、琵琶弾きやみたるほどに、大納言殿「琵琶、声やんで、物語せむとすること遅し」と誦じたまへりしに、隠れ臥したりしも起き出でて「なほ罪は恐ろしけれど、ものめでたさは、やむまじ」とて笑はる。

（七七段）

②職におはしますころ、八月十よ日の月明き夜、右近の内侍に琵琶弾かせて、端近くにおはします。これかれ、もの言ひ、笑ひなどするに、廂の柱に寄りかかりて、ものも言はでさぶらへば、「など、かう音もせぬ。もの言へ。さうさうしきに」と、おほせらるれば、「ただ秋の月の心を見はべるなり」と申せば、「さも言ひつべし」と、おほせらる。

（九六段）

右掲の傍線部は、「琵琶行」の「琵琶声停欲語遲」と「唯見江心秋月白」（第二節における引用文の傍線部）をそれぞれ典拠と

するものとして見られるが、この場合「琵琶行」の原詩句そのままの形で引用されているのではない。すなわち、①の、地獄絵の屏風觀賞後の管弦の演奏が一段落した場面においては、原詩句「琵琶声停欲語遲」の「語（かたる）」が「ものがたりす」へと変えられ、それが「琵琶行」のように単なる返事を要求するものではなく、物語（お喋り）をしようという意向を表すものとなっている。また、②の、明月下で琵琶が演奏される場面においては、当日の舞台が江上ではなく宮中であることから原詩句の「江心」の部分が「月の心」という言葉に置換されている。つまり、『枕草子』においては「琵琶行」の句が原詩句そのままの形ではなく「場」の状況に合う形に改変されて受容されていることが分かる。本稿で考察を行った、中宮定子を「琵琶行」の女になぞらえる場合は、「琵琶行」の女のイメージそのものを変えて「場」の状況に合わせた例として見るができる。

このように『枕草子』には、漢詩文受容においていろいろな方法が用いられており、その様々な方法によってこそ多様な漢詩句の受容が可能だったのではないかと考えられる。つまり、『枕草子』の「場」において漢詩文引用が機知として成り立ち得た要因は、ただ「場」に合う漢詩文の句を導入することではなく、その漢詩文を如何に「場」に合わせるか、のことだったのである。そして、そのような事実は、『枕草子』の漢詩文受容の特徴が、漢詩文の表す意味の世界への接近ではなくその世界からの離脱であることを意味すると思われる。

注(1)

その代表的なものが神田秀夫「白楽天の影響に関する比較文学的考察」(『国語と国文学』昭和23・10)である。

(2)

中宮の言葉「別れは知りたりや」に関する説を整理すると次のようになる。

*三巻本を底本とする注釈書の場合(「別れは知りたりや」)

①「典拠を『醉不成歡慘將別 別時茫茫江浸月』とする

②「今はもう人々が退下する時である意を示された」(池田亀鑑『全講枕草子』)

③「別れの悲しさは御承知？」(石田巖二『角川文庫本「枕草子」』)

④「(では同じ詩にある)『別れ』は知っているの」(田中重太郎『旺文社文庫本「枕草子」』)

⑤「典拠を『別有幽愁暗恨生 此時無声勝有声』とする

⑥「『声有る』に『勝る』『声無き』瞬間の『格別な』情緒というもの、をお前は理解出来るか」(萩谷朴『枕草子解環』)

⑦「典拠を『商人重利輕離別 前月浮梁買茶去』とする

⑧「商人婦を批判することよりも」詩の訴えかける、女の別れの悲しさというものを、お前は理解しているの」(小林美和子『別れは知りたりや』と琵琶行「枕草子94段考」『国文学攷』昭和63・3)

⑨「典拠を指摘しない

⑩中宮を琵琶行の歌妓に擬した失当に対して、あれは別れる男達の脇役と知つての上かと揶揄されたものとする。(渡辺実 新大系本『枕草子』)

*能因本を底本とする場合(「われは知りたりや」)

⑪「自分を知っているのか」とおっしゃいますのよ」(田中重太郎『枕草子全注釈』松尾聰・永井和 全集本『枕草子』)

⑫「この『ずれ』が存在する理由として清少納言の「琵琶行」に対する知識の不十分さを考える必要はほとんどないだろう。『白氏文集』中でも「琵琶行」は他の章段にもその引用例が多数見られる

ように清少納言には最も親しまれていた漢詩文の一つで、清少納言が『琵琶行』の解釈を間違っていたことは考えがたいからである。

(4) 中国では、例えば、洪邁が、

白楽天の琵琶行、蓋し尋陽の江上に在りて、商人の婦の爲にして作る所なり。而うして商は乃ち茶を浮梁に買い、婦は客に対して曲を奏す。楽天船を移し、夜其の舟に登りて与に飲む。了に忘む所無し。豈に其の長安の故の倡女なるを以て嫌と以爲ざるに非るか。集中に又た一篇有り。題して夜歌者を聞く時に京城より尋陽に讀されて鄂州に宿すと。又た琵琶の前に在り。其の詞に曰く、(下略) (容齋三筆 卷六)

と述べているように、「琵琶行」と「夜聞歌者」を関連させて考える傾向が早くからあった。なお、「琵琶行」の成立背景については、入谷仙介「白居易の『琵琶行』—その成立についての一考察」(白居易研究講座第二巻「白居易の文学と人生Ⅱ」勉誠社、平成5・7)に論じられている。

(5) 『白氏文集』「夜聞歌者」は他に源氏物語などにも引用されており(中西進「引喩と暗喩」(六)——源氏物語における白氏文集、「琵琶行」など『日本研究』第6集、平成4・3)、当時の受容の様子が窺える。

(6) このように一つの表現が二つの典拠に関わっている例としては他に、例えば二七七段の「月の明き見るばかりに、ものの遠く思ひやられて」(『白氏文集』卷十三「感月悲逝者」の「月色今宵似往年」と同集卷十四「八月十五日夜禁中独直对月憶元九」の「二千里外故人心」)がある。

(7) 『新撰朗詠集』の「妓女」部に採られている句(六六〇〇六六九)も『和漢朗詠集』の場合とはほぼ同じ様相である。

(8) 中国文学の場合、特に『白氏文集』の場合には「妓(女)」は歌舞や楽器の演奏に関わる女をさしているものの、宮廷の妓女に限られた意味ではない。日本漢詩における独自の用字法と見られる。

(9) このように当該の『枕草子』の場面構成が宮中の宴の様子を描く漢詩のそれと類似していることは、作者の念頭に漢詩の世界が意識されていた可能性も窺わせる。

(10) 例をあげるまでもないが、『源氏物語』の「少女」巻における五節の舞姫の描写などである。

(11) 五節の初日である丑の日の舞姫の衣裳が赤色の唐衣だったことは『玉葉』元暦元年十一月二十二日条の記事などによって確認される。

(12) 能因本系統の本文は当該の「ただ人」の用例の部分が、それぞれ①「人」②「ただ人」③「ただ人」④「人」となっており、「ただ人」に対する意識がやや薄いように見えるが、用字法の面においては三卷本系統の本文と同様である。

(13) このように『白氏文集』「琵琶行」の女を明らかに「妓女」のイメージで受容する例は、『枕草子』の後の作品にも見られ、例えば、『本朝無題詩』九三「聴妓女之琵琶有感」、『太平記』卷四「笠置囚人死罪流刑事付藤房卿事」などがある。

(14) 近藤春雄「長恨歌・琵琶行の研究」(明治書院、昭和56・4)などに指摘されている。

*

本文引用において、『枕草子』は石田穠二校注角川文庫本『枕草子』(三巻本を底本とする)、『白氏文集』は『白氏文集歌詩索引』、『新撰朗詠集』は『新編国歌大観』、『和漢朗詠集』・『首家文草』、『本朝文粹』・『宇津保物語』は大系本、『本朝麗藻』は『本朝麗藻簡注』、『和名類聚抄』は『倭名類聚抄 天文本』、『源氏物語』は全集本をそれぞれ用いた。

〔付記〕 本論文は第五十五回和漢比較文学会西部例会(平成九年四月、於同朋大学)における口頭発表を基にしたものである。会場で貴重な御意見をいただいた諸先生方に心よりお礼を申し上げる。